

責任者	建築学部長	担当部局	建築学部
-----	-------	------	------

1. 建築学部の理念、目的、各種方針

建築学部の理念	変更の有無
グローバルな視野で建築と都市の未来を創造し、持続可能で秩序ある生活空間の実現に貢献する。	有・無
建築学部の目的	変更の有無
<p>【目的】 魅力的で持続可能な建築や都市空間をつくるための計画・デザイン手法及びそれらを運営・管理するためのマネジメント手法の教育を通じて、建築学から現代社会における諸問題を解決する。</p> <p>【人材育成目標】 工学的知識と技術を基本としつつ、人文科学・社会科学などの知識とキリスト教主義に基づく高度な倫理観をもって、魅力的で持続可能な建築および都市空間をつくるための計画・デザイン能力と、それらを運営・管理するためのマネジメント能力を養う。単体としての建築、その集合体としての都市空間、そしてこれらを取り巻く地域社会や自然環境を、連続的・一体的なものとしてとらえ、相互の関係にまで踏み込んだ課題分析や計画・デザイン、管理運営等に関する研究教育を行う。さらに、修得した能力を地域社会や国際社会で発揮できるための語学力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力を養う。以上の能力を有する人材を育成することによって、持続可能で秩序ある生活空間の実現に貢献する。</p>	有・無
学位授与方針(DP)	変更の有無
<p>「Kwansei コンピテンシー」の獲得を念頭において、建築学部建築学科の学位授与の方針(DP)を以下のとおり定める。</p> <p>【建築学科】 建築学科は、安全・快適で美しい建築及び都市空間の計画、設計、運営等に関する専門的知識と技術を有して、グローバルな視点で建築と都市の未来を創造する国際的人材を養成する。 よって、以下のような知識と能力を有する学生に「学士(工学)」の学位を授与する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 工学的知識と技術をベースにして、魅力的で持続可能な建築や都市空間をつくるための計画・デザイン技術及びそれらを運営・管理するためのマネジメント知識。 建築空間、都市空間そして地域社会を連続的・一体的なものとして捉え、相互の関係性について深く理解し提案できる能力。 語学力、コミュニケーション力はもとより日本やアジアの建築及び都市の特徴や文化について誇りをもって解説できる能力。 最先端の建築技術やデザインはもとより地域性や歴史的文脈を踏まえて、人文科学・社会科学等、幅広い側面から取り組むことができる能力。 人々の安全や財産に深く関わるとともに公共財としての側面をもつ建築に、専門家としての高度な倫理観をもって携わることができる能力。 建築や都市デザインは多様な専門家及び住民との共同作業であることを理解し、一連のプロセスにおいて謙虚さと協調性を尊重しながらリーダーシップを発揮できる能力。 	有・無
教育課程の編成・実施方針(CP)	変更の有無
<p>学位授与の方針(DP)を踏まえ、建築学部建築学科の教育課程の編成方針(CP)を以下のよう定める。</p> <p>【建築学科】 安全・快適で美しい建築及び都市空間の計画、設計、運営等に関する専門的知識と技術を有して、グローバルな視点で建築と都市の未来を創造する国際的人材を養成するため、総合教育科目と専門教育科目から構成される教育課程を通して、建築・都市デザイン分野の知識・技能を体系的に修得できるようにする。 具体的なカリキュラムの編成方針は以下のとおりである。</p> <p>【総合教育科目】</p> <ol style="list-style-type: none"> 本学の建学の精神であるキリスト教主義に基づく人間形成によって、自らを律する強さ、倫理観、他者との協調性等の基本的な態度を身につけさせる。 英語のリーディング・ライティング・コミュニケーション能力を高める充実した英語教育を実施する。 建築や都市デザインに必要な人文科学、社会科学分野の科目及び英語以外の多様な外国語を充実させることにより、総合的な知の形成を図る。 <p>【専門教育科目】</p> <ol style="list-style-type: none"> 基礎的な表現から高度な建築設計に至るまでのデザイン能力を向上させる、1年次から4年次までの一貫した建築設計教育プログラムを構築する。 建築空間と都市空間そして地域社会を連続的・一体的に捉え、相互の関係について深く理解し計画できる能力を育成するため、建築関連科目に加えて都市・地域関連科目を充実させ、両者を体系的に配置する。 社会の具体的な課題に対して、建築や都市デザイン、まちづくりを通じた改善や解決の手法を学べるよう、多様なフィールドを体験できるPBL型の授業を充実させる。 建築の専門的職能に必須の一級建築士・二級建築士・木造建築士の受験資格に対応した専門科目をバランスよく配置し、資格取得に向けた専門科目を1年次から開講する。 	有・無

学生の受け入れ方針(AP)	変更の有無
<p>I. 関西学院大学アドミッション・ポリシー 世界を視野におさめ、他者(ひと)への思いやりと社会変革への気概を持ち、高い識見と倫理観を備えて自己を確立し、自らの大きな志を持って行動力を発揮する“Mastery for Service(奉仕のための練達)”を体現する世界市民を育成することが関西学院のミッションです。 関西学院大学は、このミッションに共感し、大学での学びや諸活動の中で、自分への挑戦をし続ける意欲にあふれ、さまざまな適性を有する多様な背景をもった学生・生徒を世界のあらゆる地域から受け入れます。 そのために、これまでに培われた確かな基礎学力、活動や経験を通じて身に付けた資質、能力、学ぶ意欲や人間性などを、多様な入試制度により多角的に評価することを基本的な方針としています。</p> <p>II. 各学部のアドミッション・ポリシー 建築学部アドミッション・ポリシー 【建築学科】 建築学科は、安全・快適で美しい建築及び都市空間の計画、設計、運営等に関する専門的知識と技術に基づいて、グローバルな視点で建築と都市の未来を創造する国際的人材を養成することで建築学の立場から社会に貢献することを目的としている。 以上の人材養成の目的に沿って、建築学科では次のような入学者を求める。</p> <p>① 建築学部及び建築学科の目的及び養成する人材像に賛同し、自然科学・科学技術の発展を通じて、自律的な態度をもって社会・文化・人類の発展に貢献しようとする学生 ② 理数系科目の十分な学力を有し、自然科学・科学技術分野の体系的な知識・技能を高い意欲をもって修得しようとする学生 ③ 人文・社会系科目の基礎学力を有し、建築・都市が存立する社会・文化・歴史等について理解しようとする意欲をもつ学生 ④ 日本語及び英語の基礎学力を有し、論理的思考に基づいて、文章読解・作成、コミュニケーション能力の向上に努める学生</p> <p>III. 入学試験毎のアドミッション・ポリシー 1. 一般選抜入学試験 一般選抜入学試験は、各学部での教育に必要な「総合的な学力を持つ受験生を選抜する」ものです。 一般入学試験では各学部の教育理念・目標に基づき試験教科・科目、配点を設定し、筆記試験により関西学院大学で学ぶために必要な学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定するための問題を独自に作成しています。 全学部日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語」「国語」を必須とし、「日本史」「世界史」「地理」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。全学部日程の国際学部については、高い英語能力を有する生徒を評価するため、「英語」に特化した「英語」「英語論述」による入学試験も実施しています。 学部個別日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語(記述式含む)」「国語(記述式含む)」を必須とし、「日本史」「世界史」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。なお文学部・法学部では「日本史」「世界史」「数学(記述式)」に加えて「地理」を選択科目に加えています。人間福祉学部については学部個別日程において「英語(記述式含む)」「国語(記述式含む)」の2科目による筆記試験を行っています。教育学部については初等教育学コースの主体性評価方式の入試において、高等学校における生徒会活動、学校行事、課外活動等でのリーダーシップを、調査書と提出書類を合わせて評価する入学試験を実施します。 理系入学試験においては全学部日程を2日間実施、入試制度も2種類実施しています。総合型および数学・理科重視型においては、本学で学ぶために必要な「英語」「数学(記述式)」を必須とし、理科(記述式)「物理」「化学」「生物」のいずれかを選択する筆記試験を実施しています。 一般入学試験共通テスト併用／英数日程は、英語・数数学型、共通テスト併用型・英語、共通テスト併用型・数学の3方式を実施しています。英語・数数学型は、関西学院大学の「英語(記述式含む)」と「数学(記述式)」による筆記試験を実施し、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定しています。共通テスト併用型・英語、共通テスト併用型・数学は、関西学院大学の「英語(記述式含む)」または「数学(記述式)」に、大学入学共通テストの教科・科目の得点を加味し、各学部で学ぶための学力と総合的な基礎学力を有する生徒を選抜するために実施しています。</p> <p>大学入学共通テストを利用する入学試験は、「一般入試とは異なるタイプの受験生を受け入れるための入試制度」と位置づけています。大学入学共通テストで実施している教科・科目の筆記試験をもとに、本学で学ぶために必要な総合的な基礎学力を「知識・技能」を中心に判定を行い、大学入学共通テストの得点のみで合否判定を行います。 1 月出願においては、総合政策学部3科目英数型を除く文系学部は「外国語」「国語」を必須として、「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点を採用する方式を3科目型、5科目型の方式で実施します。また「外国語」「国語」「数学」「地理歴史・公民」「理科」を必須とする7科目型を実施します。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。 3 月出願においては、文系学部は「英語」を必須とし、「国語」「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点科目を採用する方式を実施しています。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。 また、大学入学共通テストを利用する入学試験(1 月出願 英語資格・検定試験活用型)は、「読む」「書く」「聞く」「話す」の英語の4 技能を身に付けた生徒を選抜するために、提出された書類のうち英語資格・検定試験のスコアを出願資格として高く評価し、大学入学共通テストの教科・科目の得点を活用して実施する入学試験であり、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を得点として評価し、検定試験に取り組んだ「主体性」を高く評価します。</p> <p>2. グローバル入学試験 グローバル入学試験は、入学後、本学のスーパーグローバル大学創成事業におけるインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)に積極的に取り組むことを希望する生徒や、将来、国際的な活躍を目指す生徒を対象に3つのカテゴリーで実施する入学試験です。</p> <p>① 国際的な活躍を志す者を対象とした入学試験 国際的な活躍を志す者を対象とした入学試験は、関西学院大学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)において国際社会で活躍する能力を身に付けることを志し、秀でた英語コミュニケーション能力を有した上で、国際交流体験による異文化社会における経験、もしくは国際的課題に関して興味をもち、課題解決のための提案・実践に意欲を有する者を対象とした入学試験です。 出願資格として、英語資格・検定試験においてCEFR B1 程度以上を有した上で、海外における留学経験を有する生徒、模擬国連等に取り組み問題解決能力を育んだ生徒、全国レベルの英語弁論大会・英語エッセイコンテスト等において入賞実績を有する生徒を対象に設定し、調査書等の提出書類とあわせて、「主体性」を中心とした書類審査を行います。 さらに、英語を題材とした論述試験、日本語小論文試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価し、書類審査の結果と合わせた総合評価による一次審査を行います。二次審査では志望する学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。</p> <p>② インターナショナル・バカロレア入学試験 インターナショナル・バカロレア入学試験は、関西学院大学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)において、国際社会で活躍する能力を身につけることを志す者で、国際的に認められた大学入学資格であるインターナショナル・バカロレアDP(ディプロマ・プログラム)の課程を修了後、統一試験に合格し、インターナショナル・バカロレア資格を有する者を受け入れるための入学試験です。出願時においてフルディプロマを取得済みの者でスコアが32ポイント以上の者、もしくは取得見込でIB PREDICTED SCORE が出願時に32ポイント以上である者は英語論述審査が免除となります。 また日本の一条校において上記のスコアを有する者は日本語小論文が免除となります。これに満たない者については、英語を題材とした論述試験・日本語小論文試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価する一次審査を行います。二次審査においては学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。</p> <p>③ グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験 グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験は国際的に活躍する科学者や技術者となることを志し、自然科学に関する科目について一定の学力を有し、秀でた英語コミュニケーション能力を有する者、インターナショナル・バカロレア資格を有する者、高等学校在籍時に海外において自然科学に関する教育を受けた経験を有する者もしくは自然科学分野における特記すべき国際交流経験を有する者、国際科学技術コンテストに出場した経験を有する者を出願資格として設定し、調査書等提出された書類とあわせて「主体性」を中心に書類審査を行います。 また、入学後必要な数学、理科の基礎知識を問う筆記試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を中心に評価し、書類審査の結果と合わせた総合評価による一次審査を行います。二次審査では志望する学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や「主体性・多様性・協働性」について評価し、出願時提出書類と合わせて総合的に判断し選抜を行います。</p>	<p>有・</p>

3. 推薦入学

推薦入学は高等学校長の責任ある推薦により本学で学ぶために必要な学力を有する生徒を受け入れるものです。審査においては調査書、自己推薦書、志望理由書、学校長推薦書等の提出書類による書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

①院内推薦入学

1) 関西学院高等部

関西学院高等部推薦入学は関西学院の一貫教育の大きな柱として位置づけられています。高等部でキリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、他の入学者に対しても良い影響を与え関西学院の学風を担うことを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

2) 関西学院千里国際高等部

関西学院千里国際高等部推薦入学は、千里国際高等部の特色である国際教育と、キリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

②継続校推薦入学

啓明学院継続校推薦入学は、キリスト教主義教育により学んだ啓明学院高等学校の生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

③提携校推薦入学

関西学院大学提携校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

④系属校推薦入学

⑤協定校推薦入学

1) キリスト教学校校

関西学院大学協定校推薦入学は、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

2) グローバル校

関西学院大学協定校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。21世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

3) グローバル+キリスト教校

関西学院大学協定校推薦入学は、21世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れ、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒をも受け入れるために実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

⑥指定校推薦入学

指定校推薦入学は一定の学力を有する生徒を高等学校長の責任に基づく推薦を受け、書類審査・面接(口頭試問含む)によって総合的に評価し受け入れるための制度です。出願書類と面接(口頭試問含む)において、一定水準以上の「知識・技能」、各学部で学ぶために必要な「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」が備わっているか等を評価し、入学後の勉学における明確な志向および意欲の評価に重点を置き総合的に審査しています。

建築学部

関西学院大学建築学部を強く希望する優秀な生徒で、自然科学・科学技術の基礎知識と能力の修得に情熱を有する者を総合的学力評価に基づく推薦制度により迎え入れ、将来性ある人材に育成することを目的としています。審査では、出願時提出書類、面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

4. 探究評価型入学試験

関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー“Mastery for Service(奉仕のための練達)”を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命としています。その使命を具現化できる、意欲に満ちた受験生を求め、本入学試験を実施します。

本入学試験では、本学で学ぶにふさわしい知識・技能、思考力・判断力・表現力を有しているだけでなく、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を発見し、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を持ち、多様な人々と協働して学ぶ態度を身につけた生徒を求めています。

第一次審査においては書類審査を行います。横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して培った力を提出書類にて多面的・多元的に評価します。

さらに第二次審査において、学部毎に面接・集団討論・プレゼンテーション・口頭試問を行います。高等学校での学びを通じて培ったありのままの力を評価しますので、入学試験のために特段の準備を必要とするものではありません。

出願資格として、英語資格・検定試験スコア CEFR A2 レベル以上を有する者と設定しています。

4. UNHCR 難民高等教育プログラムによる推薦入学

「UNHCR 難民高等教育プログラムによる推薦入学」は、関西学院大学と国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連 UNHCR 協会との協定に基づき実施する入学制度です。これは本学の建学の精神に基づく「人類の幸福と平和に資する世界市民の育成」を現代に即したかたちで実現するためのものです。

日本で生活する難民の方々、厳しい環境下におかれています。特に教育面では、本人や家族の経済的事情や、母国での出身校の卒業証明が得られないなどの理由で、高等教育を受ける機会を失っている場合が少なくありません。それが就労条件の悪化、さらには、経済的事情の悪化につながっています。

こうした状況を少しでも改善することを目的とするこの推薦入学制度で入学した生徒が、高い教養と専門性を身につけ、将来、日本、母国あるいは国際社会において平和の構築や社会の発展を支える人材へと成長することが期待されています。また関西学院大学で共に学ぶ他の学生にとっても、迫害や戦争といった国際社会が抱える問題を身近に捉えるとともに、日本国内の国際化を意識する機会となります。

国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連 UNHCR 協会の推薦に基づき、面接(口頭試問含む)を行い本学で学ぶ意欲を中心にしながら「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」について評価を行います。

<p>5. スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験 この選抜入学試験制度は、スポーツ活動において優れた能力と競技実績を有し、入学後は学業と課外活動を両立させる強い意欲をもつ者を積極的に受け入れ、本学における教育の活性化と課外活動の一層の振興に寄与することを目指すものです。 提出された書類に基づきスポーツ実績を評価するとともに、本学で学ぶにあたっての基礎学力、知識、表現力、論理的思考力を筆記試験により評価を行います。一次合格者に対する二次審査は面接(口頭試問含む)を実施し志願する学部で学ぶ意欲を中心に評価を行います。</p> <p>6. 外国人留学生入学試験 本学は、米国南メソジスト監督教会の宣教師、W. R. ランバースによって創設されました。開学当初から多くの外国人教員が教鞭をとっていたこともあり、外国人留学生を古くから受け入れ、日本の大学の中では国際色豊かな大学としてその学風を育んできました。 この入学試験制度は外国人留学生を対象とし、さまざまな国からの留学生を受け入れることにより、大学の国際性を一層高め、ひいてはキャンパスの活性化を図る教育的効果も期待した、いわゆる「多元的入試」の一環として実施されます。 出願時の提出書類に基づき審査を実施し、本学で学ぶにあたって必要な日本語力および、基礎学力を有しているかを審査した後、各学部が面接審査(口頭試問を含む)・筆記試験等を実施し、志願する学部で学ぶ意欲や人間性などを中心に評価し、出願時提出書類と合わせて総合的に判断し、選抜します。</p> <p>7. 学部特色入学試験 本学のスクールモットーである Mastery for Service(奉仕のための練達)の理念のもと、自然科学の基礎をしっかり学び、それらを応用に生かしていく能力を養いたいと考えている若者たち、本学の建学の精神を背景にして、人格形成、自己の確立に努め、自然科学の知識や能力に優れているだけでなく、人間として深みのある科学者や技術者になりたいと考えている若者たち、そのような人々を対象に学部特色入試を実施し、次のような入学者を求めます。 ・関西学院大学理系学部の目標のひとつである「より良い社会の実現」のための一大研究拠点の構成員として、学部の理念に賛同し、ここで学ぶ意欲を強く持つ学生。 ・入学後に必要な数学、理科の基礎的な知識と思考力を持ち、それに加えて、自由な発想と豊かな表現力などの芸術的センスならびに、学びに向かう情熱、粘り強さ、人間性、意欲を持って学問領域を探究する学生。 ・主体的かつ継続的に知識・能力・資質を向上させる努力を惜しまない学生。</p>	
<p>教員組織の編制方針</p>	<p>変更の有無</p>
<p>(1) 専門性に富んだカリキュラムにそって、建築学部の教育目的に応じた教育・研究活動にふさわしい人材の確保に努める。 (2) コミュニケーションならびにプレゼンテーション力を養い、日本語／英語双方で、世界の建築及び都市や文化について表現できる学生を育てるため、海外での研究・教育経験を有する人材の確保に努める。 (3) 専門性・実践性・国際性を高めるため、自治体や民間企業、政府機関等で多様な実務経験をもった人材から、建築学部の教育目的にふさわしい教員の確保に努める。 (4) 教員採用にあたっては、国籍・性別を問わず、広く人材を選ぶ。 (5) 教員採用にあたっては、教員組織の年齢構成が特定の年齢層に偏らないように配慮する。 (6) 専門的かつ多様な教育の充実・強化をめざして、建築学部の教育目的にふさわしい特別客員教員や任期制教員の採用、非常勤講師の雇用に努める。 (7) 建築学部の教育目的にふさわしい英語教育常勤講師の確保に努める。</p>	<p>有・</p>

2. 実施計画

(1) 必須型

実施計画(タイトル)	1-(1)-① 「Kwansei コンピテンシー」の策定と運用				帳票の有無	不要
内容	本大学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を再策定する。 また、策定された「Kwansei コンピテンシー」を基に大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」の到達状況を測定、評価する取組を推進する。					
学部独自の取り組み内容						
<指標 1>						
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度		
目標						
実績						
年度毎の目標	※学部における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。					
目標						
実績						
<指標 2>						
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度		
目標						
実績						
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度		
目標						
実績						
【進捗状況・今後の取り組み】						

実施計画(タイトル)	1-(1)-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進(3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備)			帳票の有無	不要
内容	<p>本学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を策定する。このDPは、すべての学生が卒業/修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は(a)DPの再確認(b)DPとCP(カリキュラムポリシー)の整合(c)シラバスの実質化(d)シラバスに沿った成績評価(e)DPとAP(アドミッションポリシー)の連動、を厳格に運用する。</p> <p>本学はこうした学部/研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。</p>				
学部独自の取り組み内容	三つのポリシーの定期的確認およびポリシーに基づく学部運営				
<指標 1>	AP、CP、DPを定期的に確認、見直しを行う				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標		学部長室委員会で確認を実施	学部長室委員会で見直し、教授会で確認を実施	学部長室委員会で見直し、教授会で確認を実施	
実績		学部長室委員会で確認した	学部長室委員会で見直しについて検討(見直ししない)し、教授会で確認した	学部長室委員会で見直しについて検討(見直ししない)し、教授会で確認した	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	学部長室委員会で見直し、教授会で確認を実施	学部長室委員会で見直し、教授会で確認を実施	学部長室委員会で見直し、教授会で確認を実施	学部長室委員会で見直し、教授会で確認を実施	
実績					
<指標 2>	学部教務委員会(CPに基づく学部運営の一環)の開催数				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標		年度あたり3回	年度あたり5回	年度あたり5回	
実績		4回	執筆時で7回開催、今後4回開催予定	執筆時で12回開催、今後2回開催予定	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	年度あたり5回	年度あたり5回	年度あたり5回	年度あたり5回	
実績					
【2023年度の進捗状況・今後の取り組み】					
<p>学部長室委員会で各ポリシーの確認を行い、変更の必要が無いことを合意のうえ教授会に報告し、教授会メンバー全員で確認を行った。今後も継続して確認・見直しを行い、ポリシーに基づく学部運営をより強く意識して、教務は学部教務委員会を中心として、入試は事務局と密に連携し、運営にあたる。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(9)-① 入試制度改革への対応			帳票の有無	不要
内容	<p>グローバル化や情報化の進展、少子高齢社会の到来など社会の在り方が急速に変わり、予測が難しい状況の中で、自ら問題を発見し、他者と協力して解決していくための力が必要とされており、2015年1月に文部科学省より「高大接続改革実行プラン」が発表され、高大接続改革は、「高校教育」「大学教育」そしてそれをつなぐ「大学入学者選抜」の一体的な改革で、それぞれについて様々な施策が進んでいる。「大学入学者選抜改革」においては、これまで以上に多面的・総合的に人物を評価する入試への転換を掲げ、大学入試センター試験を廃止し、思考力・判断力・表現力を一層重視した「大学入学共通テスト」を2020年度(2021年1月実施)より導入。大学入学共通テストでは、国語と数学に記述式問題を導入すること、英語については4技能を適切に評価するため民間の資格・検定試験を活用することが決まっている。また、各大学の個別選抜では、アドミッション・ポリシーの明確化とともに、より多面的な選抜方法にすることが求められている。一方、AO入試や推薦入試では、一部で「学力不問になっている」といった批判があることから、小論文やプレゼンテーション、大学入学共通テストなどを通じて、学力を問う試験を必須化する方針も示されている。</p> <p>このような状況において、本学においては学長が入試委員長として全学部長が入試委員となる入試委員会が中心となり、以下のような入試制度改革を進めていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高大接続改革で求められる入試制度改革への対応 上記の改革を進めるため、本学ではすべての入試において「学力3要素」を評価する入試へと変えていく。また、SGUでもある本学においてはすべての入試において英語の4技能を評価する入試へと変えていく。合わせて、各種入試においても、現行やや一芸入試的な色合いの濃いAO入試においては高等学校での活動をしっかりと評価する入試への変更を、そして、現行SGH・SSH指定校に限定している公募推薦入試も課題研究を実践しているすべての高等学校に拡大し、高等学校での探究活動を評価する入試へと変更させていく。 2. 現行入試制度・募集人員の再検討 上記のような国の高大接続改革が進むと、例えば、国公立大学ではAO入試の割合が増加する。また、18歳人口の減少という人口構造の変化(少子化)により、より一層前倒し(各種入試への定員のシフト)によって学生を確保する必要がある。今後、各種入試と一般入試の定員比率の再検討とともに、各種入試の定員の見直しを進める必要がある。 3. 主体性等を評価するための入試体制強化やアドミッションオフィサー配置 上記のとおり、今後の大学入試においては、学力3要素を評価するため、小論文やプレゼンテーション、課題研究論文、面接や調査書など高等学校への学びをひとりひとり丁寧に評価する入試が拡大してくる。それに伴って当然、これまで入試選抜を担ってこられた教員だけでは対応することが困難となる。そのため、職員からも提出書類の評価を行うアドミッションオフィサーを配置することが求められる。今後、アドミッションオフィサーへの入試評価業務の委嘱を進めていく。 				
学部独自の取り組み内容	2021年度学部新設に伴い、各種入試、一般入試の制度を構築する。				
<指標1>	偏差値				
年度毎の目標	2020年度(2021年度入試)	2021年度(2022年度入試)	2022年度(2023年度入試)	2023年度(2024年度入試)	
目標		前年比上昇	前年度維持	前年度維持	
実績	非公開	非公開	非公開	非公開	
年度毎の目標	2024年度(2025年度入試)	2025年度(2026年度入試)	2026年度(2027年度入試)	2027年度(2028年度入試)	
目標	前年度維持	前年度維持	前年度維持	前年度維持	
実績					
<指標2>	志願者数(一般入試)				
年度毎の目標	2020年度(2021年度入試)	2021年度(2022年度入試)	2022年度(2023年度入試)	2023年度(2024年度入試)	
目標		前年比増	前年度維持	前年度維持	
実績	非公開	非公開	非公開	非公開	
年度毎の目標	2024年度(2025年度入試)	2025年度(2026年度入試)	2026年度(2027年度入試)	2027年度(2028年度入試)	
目標	前年度維持	前年度維持	前年度維持	前年度維持	
実績					
【2023年度の進捗状況・今後の取り組み】					
<p>2024年度入試(2023年度実施)は、3月の共通テスト利用の出願者を含まず、前年度を上回ることができ、志願者数は学部開設以降、順調に推移している。18歳人口の減少が続くなかでも、このまま競争力を維持することが重要で、そのための入試・広報にかかわる戦略は最重要事項と認識している。完成年次以降も学部競争力を強化するうえに最重要となる「優れた受験生の獲得」に向けて、一般入試および各種推薦入試の制度改革を行い、情報発信のタイミングや媒体・ターゲット・内容・頻度・方法等を見直し、“関学建築ファン”を増やすことで志願者増(志願者維持)を目指す。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(12)-⑧ シラバスの実質化			帳票の有無	不要
内容	組織的な教育力を向上するため、三つのポリシーに基づく教学マネジメントを推進することが中心的な課題であり、そのための重点戦略としてシラバスの精緻化から取り組む。特に「授業目的」と「到達目標」を明確にすることで、カリキュラム全体の中での科目の位置づけや他の科目との比較が可能になり、科目間の相互関係を整理する契機となる。それによって CP や DP の適切性・妥当性といった上流に遡ることが可能となる。また、シラバスの精緻化は、授業外学修時間の増加につながる。				
学部独自の取り組み内容	シラバスの記載内容の充実を図る				
<指標 1>	「授業計画」欄を授業の各回に記載している科目割合				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標		60%	70%	80%	
実績		非公開	非公開	非公開	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	90%	95%	95%	95%	
実績					
<指標 2>	「授業外学習」欄を授業の各回に記載している科目割合				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標		50%	50%	55%	
実績		非公開	非公開	非公開	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	55%	60%	60%	65%	
実績					
【2023 年度の進捗状況・今後の取り組み】					
「授業計画」を各回の欄に記載している科目については今後も、100%を目指す取り組みを続けていく。また、「授業外学習」については改善しているが、今後改善が必要である。具体的には、学部 FD 委員会を活用し、また第三者チェックを徹底のうえ、講義担当教員に対して本計画の目的を改めて認識させることで記載内容の充実を図っていく。					

実施計画(タイトル)	1-(13)-② 教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組み確立			帳票の有無	不要
内容	<p>教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組みを確立し、学生の学びをサポートし、残留生、退学者をださないキャンパスを目指す。アカデミックアドバイス制度は実施から4年がたち、現在行われている対象学生の見直しなどの検討も必要となっている。</p> <p>— 以下、SGU時の文章 —</p> <p>本学では、従来から成績不振者へのサポートを目的とした様々な指導を学部ごとに実施してきたが、GPAのさらなる活用と学生に対してより適切かつ高度な学修支援を行うという観点から、2015年度より「アカデミックアドバイザー制度」を全学的な仕組みとして導入する。</p> <p>アカデミックアドバイザーは、学部ごとに人数を定め、学部所属の専任教員から選出するものとする。各学部は修得単位数、GPA、出席状況のいずれか、もしくは複数を用いて指導対象となる学生の基準を定める。指導対象学生に対しては、アカデミックアドバイザーが個別面談および学修指導等の修学上の支援を行う。</p> <p>制度導入後は、教育力向上(ファカルティ・ディベロップメント)部会において本制度の運用状況に関する情報共有を行い、より一層の改善等に取り組む予定である。</p>				
学部独自の取り組み内容	<p>アカデミックアドバイザー制度の充実および活用</p> <p>建築学部では在学生の学業や生活に関する支援をきめ細かく行うために「学年アドバイザー制度」を導入している。</p>				
<指標1>	面談対象者の抽出基準の定期的な見直し				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標		仕組みの確立	見直しを実施	見直しを実施	
実績		仕組みの確立と抽出基準を確定	抽出基準を確認し、微調整を行った	見直しを実施	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	見直しを実施	見直しを実施	見直しを実施	見直しを実施	
実績					
<指標2>	学年アドバイザー制度の継続的な検証と改善の実施				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標		仕組みの確立	見直しを実施	見直しを実施	
実績		仕組みを確立した	微調整を行い運用した	見直しを実施	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	見直しを実施	見直しを実施	見直しを実施	見直しを実施	
実績					
【2023年度の進捗状況・今後の取り組み】					
<p>在学生の学業や生活に関する支援をきめ細かく行うためのアカデミックアドバイスの仕組みとして、理・工・生命環境学部の仕組みを参考に「学年アドバイザー制度」を導入している。今期はこの役割を担う教員の設定に微調整を加えたうえで運営したが、来期は見直しを行ったうえで運営する予定である。また、学年アドバイザーがアカデミックアドバイザーを兼ねており、これら教員によってアカデミックアドバイザー面談も滞りなく実施された。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(13)-③ TA・LA・SAの活用推進			帳票の有無	要
内容	<p>LAの配置により、授業での教育支援(教員への支援を含む)、授業外での学修支援を強化する。初年次教育である導入科目等を対象としたLAIについては制度開始から7年がたち、今後の在り方は新たなライティングサポート制度と合わせて考えていく。</p> <p>SAについては、特に全学科目情報科学科目の現状の課題を抽出し、現状のままか、外部委託するかを検討する。</p> <p>TAについては各学部では、①大学院生の減少で確保が難しい、②大学院生全員にあたらぬ、③月額報酬の場合、報酬に対して実働が少ない、人によって実働に差が生じる、④確保したいが他研究科生を重複採用できない、などの課題があり、①業務実働に合わせた報酬制度、②他研究科生の重複採用、③外部委託、などを検討することが考えられる。</p>				
学部独自の取り組み内容	<p>可能なかぎり多くの学生に、設計系演習・CAD系・実験科目のLA・SAとしての経験を積む機会を与える。</p> <p>TA・LA・SA制度を有効活用するために、学部教務委員会でその効果を検証する。その検証を通して改善を図る。</p>				
<指標1>	TA・LA・SA制度の運用効果について検証を実施する				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標		TA・LA・SA制度の運用効果を検証する	TA・LA・SA制度の運用効果を検証する	TA・LA・SA制度の運用効果を検証する	
実績		検証行わず	執筆時点で未実施 (3月に予定)	執筆時点で未実施 (2月に予定)	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	TA・LA・SA制度の運用効果を検証する	TA・LA・SA制度の運用効果を検証する	TA・LA・SA制度の運用効果を検証する	TA・LA・SA制度の運用効果を検証する	
実績					
<指標2>	TA・LA・SA経験者の人数				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標		カウント初年度	前年比増	前年比増	
実績		0名	32名		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	前年比増	前年比増	前年比増	前年比増	
実績					
【2023年度の進捗状況・今後の取り組み】					
<p>開設から学年が進行するにつれて開講科目も増加していくが、それにきっちりと対応して授業科目におけるTA・LA・SAの需要を充足させ、学部教務委員会等で運用効果の検証を進めていく。</p>					

実施計画(タイトル)	8-(2)-① KGI・KPIの設定・活用			帳票の有無	不要
内容	<p>非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム(成果)を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」(超長期ビジョン・長期戦略)および中期総合経営計画(実施計画・基盤計画)の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自にKPIを設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取組みに活用する。</p>				
学部独自の取組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※本帳票の末尾において、学修成果を測定する学部独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度学部における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【進捗状況・今後の取組み】					

実施計画(タイトル)	8-(10)-① 内部質保証体制の確立と運用			帳票の有無	要
内容	<p>本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画(含む)であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。</p> <p>このため、本学では、2019年度から各学部／研究科、短期大学・各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標1>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※2020年度入学生より、「Kwansei コンピテンシー」を獲得することを念頭に置く旨を、各学部のディプロマ・ポリシー(DP)に追記済。				
目標					
実績					
<指標2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
【進捗状況・今後の取り組み】					

(2) 選択型

実施計画(タイトル)	1-(2)-② 各学部の独自指標の設定	帳票の有無	不要	
内容	<p>■本長期戦略では、「『質の高い就労』の実現」をテーマに、「就職率」「内定先の満足度」「各学部設定の独自指標」「有名400社への実就職率」「IPOの人数」「グローバル企業就職者比率」「一部上場企業社長の輩出人数」を指標とし、各フェーズ・年度における目標値を定めた。これを達成するための実施施策は、「高い『就職率』維持のための各種施策の実施」「高い『内定先の満足度』維持のための各種施策の実施」「『有名400社への実就職率』向上のための各種施策の実施」「『グローバル企業への就職者比率』向上のための各種施策の実施」そして「『各学部の独自指標』の設定」「アントレプレナー養成のための各種施策の実施」「AIを活用したキャリア支援」をあげている。</p> <p>■本帳票は、これらの内、「『各学部の独自指標』の設定」について記載する。</p> <p>■各学部はそれぞれ特色があり、人材養成像も各学部で異なる。従って、「質の高い就労」を実現するための大学全体の実施計画(指標)とは別に、独自の指標を持つ必要のある学部がある。その際に独自指標を設定する。</p>			
学部独自の取り組み内容	建築学部の卒業生から、一級建築士の合格者を毎年輩出する。			
<指標1>	本学部卒業生の一級建築士の合格者数			
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
目標	/			
実績	/			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
目標	今後検討		今後検討	
実績	/			
<指標2>	本学部卒業時の一級建築士の受験資格者数			
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
目標	/			
実績	/			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
目標	120	120	120	120
実績	/			
【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】				
一級建築士の輩出は、建築学部として設置されている以上「社会的責任」である。現時点では指標としての目標数を定めていないが、1期生の卒業を見据えて検討していく。				

実施計画(タイトル)	1-(11)-② 学部におけるハンズオン・ラーニングプログラムの推進	帳票の有無	要	
内容	<p>SGU ダブルチャレンジ制度では、アウェイチャレンジ(①インターナショナルプログラム、②ハンズオン・ラーニングプログラム、③副専攻プログラム)の単位を修得して卒業する学生数(実数)を指標としており、SGU最終年度の2023年度においては5700名を目標数値としている。その5700名のうち約3000名が②ハンズオン・ラーニングプログラムの単位を修得することがもう一つの目標値である。目標である3000人を達成するためには、ハンズオン・ラーニングセンター開講科目の単位修得者数を増加させることはもちろんではあるが、学部におけるハンズオン・ラーニングを推進し、学部開講ハンズオン・ラーニングプログラム単位修得者数の増加を図らなければならない。</p>			
学部独自の取り組み内容	参加者数を増加させる			
<指標1>	建築学部が設置するハンズオン・ラーニングプログラム履修者数			
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
目標	初年度		前年比増	
実績	0名		32名	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
目標	前年比増		前年比増	
実績	/			
【2023年度の進捗状況・今後の取り組み】				
完成年次までは科目の増減は難しい部分もあり、次年度に向けては履修者数の増加を中心的課題として取り組みつつ、ハンズオン・ラーニングプログラム科目の新設についても検討する。				

3. 建築学部のKPI

(1) 学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
DPIに定める資質・能力の獲得状況	あなたはこの授業を通して卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、上位2つ(A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」)の回答割合(%)	現在値(2018年度)			非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Kwansei コンピテンシー獲得状況	知識・能力・資質の程度 全項目(「大変身についていない」の5段階評価) (2018～2022年度) 当該年度卒業生と次年度1年生との調査による伸び (2023～2027年度) 当該年度卒業生とその1年生時との調査による伸び 「IR 新入生調査」「IR 卒業生調査」	5段階評価のうち、上位2つ(「大変身についていない」の5段階評価)の平均の差の回答割合(%)	現在値(2018年度)				
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
汎用的能力の獲得状況	入学後の能力変化(表外※参照)(「大きく増えた」～「大きく減った」の5段階評価) 「IR 上級生調査」	5段階評価のうち、上位2つ(A「大きく増えた」、B「増えた」)の回答割合(%) →2022年度の調査見直しにより、当該項目は調査項目から削除。(Kwansei コンピテンシーとの重複)	現在値(2018年度)				
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業外学修時間	授業外時間に、授業課題や準備時間、復習をする時間(一週当たりの平均) 「IR1年生調査、IR 上級生調査」 →【2022年度データの変更点】 2022年度実施分から調査名称を「学生調査」に変更。	一週あたり6時間以上の割合 →【2022年度データの変更点】 学生調査の変更により、2022年度以降は「一週あたり5時間以上」の割合に変更。	現在値(2018年度)			非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業目的・到達目標の達成度	あなたは、シラバスに示された授業の目的や、到達目標を達成できると思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかというそう思う」の回答割合(%)	現在値(2018年度)			非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業満足度	あなたは、全体としてこの授業に満足していますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかというそう思う」の回答割合(%)	現在値(2018年度)			非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
留学等派遣数	協定校への派遣学生数 「国際連携機構資料」	大学間協定に基づく派遣日本人学生数	現在値(2018年度)			非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
TOEIC/TOEFL等の英語運用能力	SGUの取組みで確認している TOEFL 換算得点目標の達成人数 <参考(学部別目標値)> ■国際: TOEFL 換算 550点 ■文・総政: TOEFL 換算 540点 ■その他: TOEFL 換算 520点 「SGUに関する調査」	左記「TOEFL 換算得点」目標の達成人数(人)	現在値(2018年度)			非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
学生生活満足度	大学生活を振り返って、学生生活は満足したものでしたか。(「満足」～「不満」の5段階評価) 「IR 卒業1年目調査」	5段階評価のうち、上位2つ(A「満足」、B「そこそこ満足」)の回答割合(%) *2018年度調査までは、A「とても満足」、B「満足」と回答した比率	現在値(2018年度)				
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
					非公開	非公開	非公開
就職率	就職率 「キャリアセンター統計資料」	就職者数(自営含まず)/就職希望者数	現在値(2018年度)				
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
				非公開	非公開	非公開	非公開
大学院進学率	大学院進学率 「キャリアセンター統計資料」	大学院進学者数/学部卒業生数	現在値(2018年度)				
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
				非公開	非公開	非公開	非公開

(※)「知識・技能・能力の獲得状況」の「知識・技能・能力」とは、一般的な教養、論理的思考力、専門分野や学科の知識、グローバルな問題の理解、多様性を尊重する力、主体的に行動する力、リーダーシップ力、人間関係を構築する力、対立する価値を調整する力、地域社会が直面する問題を理解する能力、国民が直面する問題を理解する能力、困難を乗り越える粘り強さ、文章表現の能力、外国語の運用能力、生涯にわたって学び続ける能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、数理的な能力、コンピュータの操作能力、誠実さと品位、時間を効果的に利用する能力、卒業後に就職するための準備の程度、を指す。

(2) 学部独自KPI

KPI	定義	基準	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
一級建築士の合格者数	本学部卒業生の一級建築士の毎年の合格者数 (累計ではない)						
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
					非公開	非公開	非公開
本学建築学研究科への進学率 (研究科のあり方、研究科名称は、執筆時は検討中のため仮)	本学部の研究科・博士課程前期課程への進学率 (本学建築学研究科進学者/卒業者)		現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
				非公開	非公開	非公開	非公開

(3) 学院全体のKPIIに関する指標

KPI	定義	基準	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
入試難易度 (偏差値)	ベネッセの進研模試のデータにおける合格可能性 60%以上となる偏差値 (次年度偏差値予想を記載) 高大接続センター				非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
同系列学部勝敗	ベネッセの進研模試のデータにおける同系列学部合格者の競合大学(同志社、立命館、関西)との入学比率 (当該年度結果を記載) 総合企画部	本学と相手校の両方に合格していずれかに入学した受験生のうち、本学に入学した者の比率 本学入学者数/(本学入学者数+併願校入学者)(%)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
外国人留学者数	外国人留学生 CIEC 年次報告書	詳細は SGU の定義に準拠	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
ダブルチャレンジ派遣者数	当該年度の卒業生のうち、ダブルチャレンジ制度のアウェイチャレンジの単位を取得して卒業した学生数 グローバル化推進本部	①インターナショナルプログラム②ハンズオン・ラーニング・プログラム③副専攻プログラムのいずれかで単位取得し卒業した学生数 ※学部毎は延べ人数	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
				非公開	非公開	非公開	非公開
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度 (「満足」～「不満」の5段階評価) 卒業時調査	5段階評価のうち「満足」と回答した比率(%)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
				非公開	非公開	非公開	非公開
スクールモットーの浸透度	スクールモットー“Mastery for Service”を普段意識する程度は (「常に行動の規範としている」～「全く意識しない」の5段階評価) IR 卒業生調査	5段階評価のうち、A「常に行動の規範としている」または B「ときどき意識している」と回答した割合(%) * 2018年度調査までは A「常に行動の規範としている」または B「頻繁に意識している」と回答した比率	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
					非公開	非公開	非公開
Well-being 度	現在の自分を取り巻く環境(特定 7 項目)に対して、あなたはどのように感じますか。 (「そう思う」～「そう思わない」の 4 段階評価) IR 卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になることがある」を除く7項目に対して A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」と回答した割合の平均値	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
					非公開	非公開	非公開

建築学部実施計画・全体評価
<p>完成年次までは、特に CP に関連する教育課程の編成について丁寧に検証を進めていく。学生調査の結果によると、授業における学生間の議論の機会や授業内容についての教員による深化について高評価であり、この強みは活かしていきたい。</p> <p>一方、AP に関わる入試計画については、単年度の結果・実績に一喜一憂せず、毎年の状況を丁寧に分析し、その結果(実績)を積みかさね、適切な目標設定とその検証を進め、必要に応じて入試制度の改革も検討する。</p> <p>建築学部の KPI の一つは、社会的評価にもつながる「一級建築士の合格者数」としているが、結果が判明するまでにはまだ年数を要する。その結果は、必然的に AP・CP・DP の内容と、それらの関連性が適切であったかを証明するものでもあるため、指標の意味合いを学部内でも明確にし、構成員の理解をより深め、実行していく。学生調査の結果によると1年生時点での大学院進学希望者割合は全学部中トップであり、意欲の高い学生を院内進学に導けるよう働きかけていく。</p> <p>各計画の検討・実行・検証など、学部運営の中心に関わる事柄においては、学部新設に関わった教員への依存度が必然的に高くなっており、その傾向は大学院設置を控え、より顕著となってきている。負担軽減の方策を考えるとともに、新任教員の関与、学部運営の次代を担う教員育成も必要である。学部執行部への早期参入や学部内各種委員会を複数年経験してもらうなど、中長期的な計画が必要である。</p>